

東北画は可能か?

Is Tohoku painting possible?

三瀬 夏之介 | Natsunosuke MISE

1. はじめに

2009年3月、慣れ親しんだ故郷、奈良での10年間の高校教員生活を終えて、東北芸術工科大学に赴任することになった。

着任して驚いたことは、学生たちから「地域」や「信仰」といった、当時のアートシーンからは掛け離れた言葉がよく聞かれることであった。

着任して間もない6月から、東北芸術工科大学が協力しているアートプロジェクトである「ひじおりの灯」(写真1)に参加するため、大蔵村の肘折温泉に学生たちと共に入り込み、フィールドワークを通じて地域の方々とのコミュニケーションを取りながら、灯籠と屏風作品を制作するという機会を得た。



【写真1】「ひじおりの灯」

そこでの経験は、それまで何となく「アートシーン」と呼ばれる場所で「自己表現」を展開してきた私自身の作家活動に、深い反省をもたらせるものとなった。共に参加した学生

たちも、所在のよく解らない自分探しというものによる虚無に包まれたアトリエから大自然の中に分け入り、湯を守りながら生活を営む人々との対話を続けることにより、力強くも優しい作品を生み出すように変化していく。何よりも、ここには土地に根ざした制作の初期衝動がしっかりと在り、見せるべき、語るべき相手がいた。ものを作る前に考えなくてはいけないことがあり、行かなくてはならない場所、会わなくてはならない人々が在る、という当たり前のことに気付かされる経験であった。アートシーンから遠く離れた、この東北という場所における美術の可能性を探ることが、この大学で私がすべきことであると直感し、そこから『東北画は可能か?』というテーマが浮かんだ。

2. 「東北」を探る旅へ

東北芸術工科大学には「チュートリアル」という、教員と学生が共に興味や関心の在ることを課外活動として進める仕組みがあり、先ずはこの枠組みで『東北画は可能か?』という問いを考えていくことにした。

学科やコースを超えて、能動的に学生が集まり、対話が生まれるこの仕組みは、カテゴライズされた美大の専門性の枠組みを超えることの出来る軽やかさがあり、実際、絵画を中心に進める活動にも関わらず、美術系以外からも、デザインや映像、企画構想、文芸など、様々なコースの学生たちが領域横断的に集まった。

『東北画は可能か?』、この問いは、日本の中での東北という辺境(世界の中での日本という辺境)において、その地

域名、国名を冠した絵画の成立の可能性を探る試みであり、地産地消的アートマーケット、東アジアへの展開までもを視野に入れた挑戦を目論んだ。またそれは、「日本」や「東北」と一括りにされた風土、価値観の投影に対する地方からの逆襲でもあり、一つの言葉では決して括ることの出来ない様々なグラデーションを巡りつつ、全国から集まったチュートリアルメンバーそれぞれの制作動機を探る旅でもあった。

「東北画」といっても、それは旧来の「日本画」のような画材や制度に規定されるものではない。日本の中の東北という、縁あって「今」私たちが住む「ここ」という場所の、歴史的な成り立ちと自身の関係性を読み解き、他者に向けて表現すべき必然性のある素材や技法を再選択させる。つまり、『東北画は可能か?』の「東北」には様々なものが代入される可能性があり、何処に住もうとも、何が起ころうとも、力強くものを生み出していった欲しいという、私から学生への願いでもある。

アートという、正解がなく、常に評価軸の移ろうものに対して、どのように美術大学は機能出来るのか? 教員の趣味や印象批評ではなく、何を以て学生の作品を判断するのか? という美術教育の根源を問うために、まずは「東北」という地域を持ち寄って共に語り合うところから始めた。そして、「今」、「ここ」、「わたし」、が交わる場所に、各々の「東北画」が生まれると設定し、地域や歴史の勉強会(東北の大学という、知見の収蔵庫が素晴らしく機能した)、取材旅行、フィールドワーク、地域型アートプロジェクトへの参加などを行い、そこから生まれたエスキースに対してのディスカッションなどを通して、各々の「東北画」が生まれてきたのである。(写真2)

また、有志メンバーによる共同制作の取り組みも始めた。

今日のアートの現場が、単独の作家性への疑義から、集団的な共働性や匿名性へと傾きつつあるという実感に即した、プラットフォームのような美術の現場の創出が出来ないか、という試みである。東北を語る時に多くのメンバーが口にする「山」をテーマにしたものから始まり、これまでに「方舟」「水」「花」「妖怪」「裂織(さきおり)」など、その時々メンバーたちが直面した問題に触発された共同制作が生まれた。



【写真2】『東北画は可能か?』ディスカッション風景

しかし東日本大震災以降、それまで固有の背景を持ったメンバーの問いの中から様々な東北観を生み出してきたはずの『東北画は可能か?』は、逆に統一的な回答を求められているように感じるが多くなった。未曾有の危機に直面し、求心的な「東北」の復興を求める声と、この土地での美術の実践とは決して無関係ではない。

『東北画は可能か?』は、これからの東北の呪縛を解体し、再構築することが求められるのだろう。

持っている情報や経験で解こうとせず、さらに自身を拡張し続ける姿勢は多大な体力を要するが、学生たちには、常に問いを発見しながら力強くものを生み出していった欲しいと願う。

3. 「東北画は可能か?」によせて

芸術工学研究科 芸術文化専攻
日本画研究領域 修士2年
渡辺 綾(写真3)

「東北」が多くの人々に意識されるようになった現在、「東北」を学びの場として選ぶ学生たちは、様々な思いを持ってここへやってくるだろう。けれど、私がここで芸術を学ぶことを決めた時は、まだ「芸術を学ぶなら東京を目指すべき」という雰囲気が根強かった。「東北」で描きたい、という思いを理解してもらうことは容易なことではないと感じた。

この状況を打開したいという思いから「東北画は可能か?」に参加した。この活動を通じて出会った場所や人々か

ら「東北」で描き続けていくことの可能性を感じ、「東北画」として制作してきた作品たちは「ここで描きつづけていける」という自信を与えてくれる存在となった。私にとって「東北画」の問いは、自分が今いる場所、自分が今まで過ごしてきた場所、これから生きていくべき場所について考えを深める入り口となり、そこで見つけた答えが、私の「東北」で描きたいという思いを確かなものになっている。



【写真3】制作風景(渡辺 綾)

【活動実績】

- 「東北画は可能か? 其ノ一」
2010年4月5日～10日 @アートスペース羅針盤／東京
- 「東北画は可能か? 其ノ二」
2010年9月28日～10月10日 @art room Enoma／仙台
- 「東北画は可能か? 其ノ三」
2010年10月9日～11日 @art_izm／山形
- 「東北画は可能か? 其ノ四」
2010年11月20日～2011年12月19日
@十和田市商店街／青森
十和田市現代美術館との共催事業
- 「東北画は可能か? 一方舟計画」
2011年5月7日～21日 @imura art gallery tokyo／東京
- 「東北画は可能か? 一方舟計画」
2011年7月19日～31日 @art room Enoma／仙台
- 「東北画は可能か? 一方舟計画」
2011年10月1日～11月23日 @大和川酒造 昭和蔵／喜多方
会津・漆の芸術祭2011～東北へのエール～に参加
- 「東北画は可能か?」
2011年10月22日～30日
@奈良女子大学セミナーハウス 正木家／奈良
奈良・町家の芸術祭HANARARTに参加

- 「東北画は可能か? @neutron tokyo」
2012年1月11日～29日 @neutron tokyo／東京
- 「東北画は可能か?」
2012年2月4日～4月8日 @川崎市岡本太郎美術館／神奈川
岡本太郎現代芸術賞 入選
- 「東北画は可能か?」
2012年4月17日～5月2日 @東北芸術工科大学 スタジオ144
- 「東北画は可能か?」
2012年10月6日～11月23日
@喜多方市喜多方蔵の里 旧外島家
会津・漆の芸術祭2012～地の記憶 未来へ～に参加
- 「東北画は可能か?」
2013年8月28日～9月8日 @コラボラトリー
9月11日～10月6日 @project room sasao／秋田
- 「東北画は可能か?～まなごしの解放～」
2013年8月31日～9月23日 @ARTZONE／京都
京都造形芸術大学ASP学科との連携事業
- 「東北画は可能か?」
2013年9月9日～9月29日 @江鶴亭 土蔵／鶴岡
山王アートキャンパス2013に参加
- 「東北画は可能か?」
2013年10月18日～25日 @安藤醸造元本店／角館
ネオ・クラシック!カクノダテに参加
- 「東北画は可能か?」
2013年10月26日～11月10日 @喜多方蔵の里
喜多方・夢・アートプロジェクト2013に参加、喜多方地域でのレジ
デンス事業に参加

【主な参考文献】

- 『東北を描いて考える』「朝日新聞」2010年4月2日
- 『多彩に表現した「東北画」』「山形新聞」2010年9月29日
- 小金沢智『「東北画」のその先へ』「月刊ギャラリー」2010年11月号
- 河村亮『動き始めた美術家たち』「京都新聞」2011年4月30日
- 『「東北画」の可能性』「読売新聞」2011年5月14日
- 岸桂子『絵筆で記憶を刻みつける』「毎日新聞」2011年5月17日
- 『山形で「東北画」の可能性を問う』「美術手帖」2011年11月号
- 三沢典丈『「東北画」可能性探る(展覧会紹介)』「東京新聞」2012年1月23日
- 小川敦生『「東北画」理解と励まし(展覧会紹介)』「日本経済新聞」2012年1月23日

[執筆者]

三瀬 夏之介

Natsunosuke MISE

芸術学部 美術科

Department of Fine Arts, School of Art

准教授

Associate Professor

東北画は可能か？（本文p.4参照）



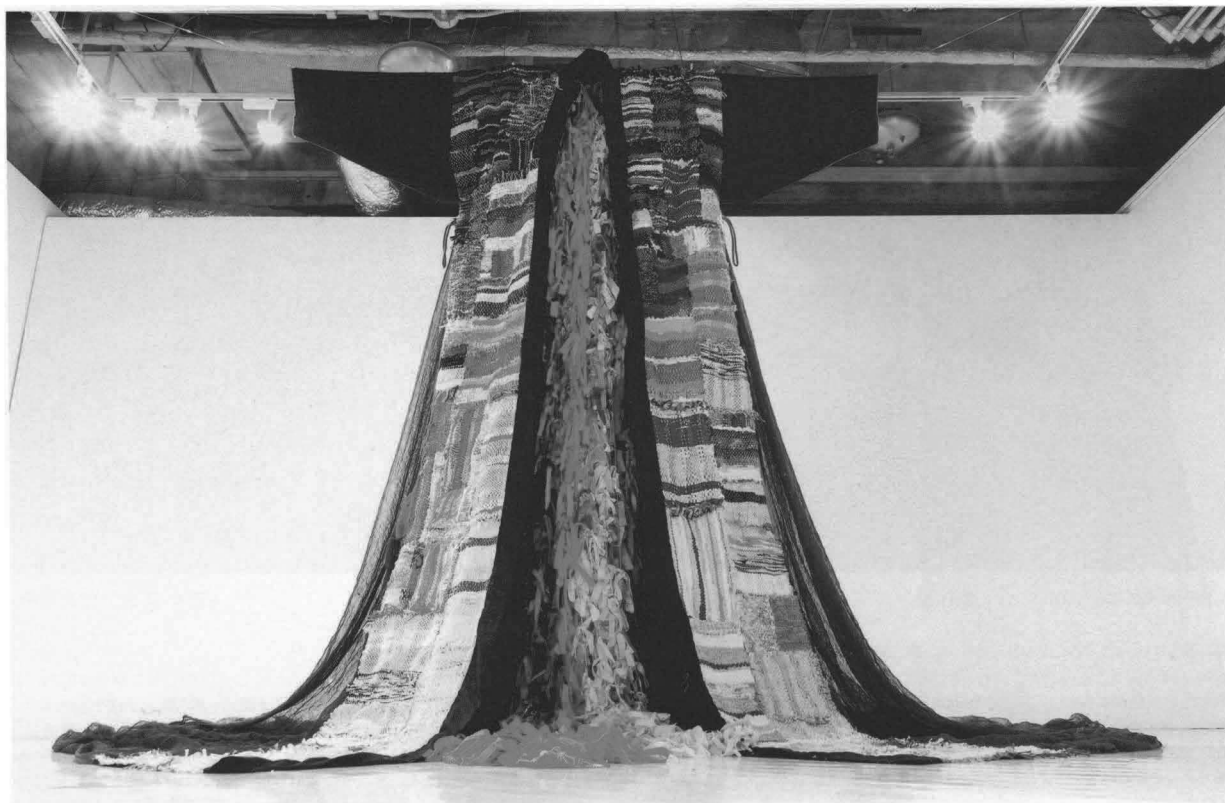
「方舟計画」2011 229.5×384 cm
有志メンバー「チーム方舟」が震災直後の2週間という短い期間で制作。



「東北八重山景」2010 234×385.4 cm
有志メンバー「yama no e」が東北の山々をイメージして制作。



「東北山水」2011 229.5×384 cm
有志メンバー「チーム水源郷」が喜多方を取材して制作。



「しきおり絵詞」2013 サイズ可変
有志メンバー「日々織々」が青森での体験を通して制作。



「鴻草」 鴻崎 正武

いつか故郷に帰ったとき、家やお墓、土地や海に「大変だったけどもう大丈夫だよ。」
と言ってあげよう。



「山の神さま〜みちるべ〜」 渡辺 綾

海に暮らす人々は、海に出ると山を目印に港に帰るそうだ。
だから、海の人々と山の神とのつながりは深い。
私の住む土地にも「みちるべ」の山がある。山たちは、
あの日、押し寄せる波をどんな思いで見っていたのだろう。
山の神さまは動くことはできない。
海の人々をその手で救うことはできない。
けれど、また「みちるべ」になれるよう、ここで静かに
春を待っている。



「レイヤー」 佐々木 綾子

今や東北＝震災になっている。なので真正面から震災の事を描いてみようと思った。

何枚か小下図を描いてみたがまとまらない。無理にまとめなくてもいいかと考え、出た小下図を全て使い、言葉も入れながら表すことにした。出来た作品はこれでもかというほど説明的になってしまった。しかしそれが東北だけどころなに被害がでなかった山形にいた私と、被災地の本当の距離なのかな?と感じた。



「ひと山むこうでなまzug」 久松 知子

あばれた
短い時間のできごとだったけど
たくさんの人のあらゆるものが揺れた
なまzugにしてみれば、



「東北遷都計画」 佐々木 優衣



「si:」 石原 葉

あの日から一年と少し経った後、松島の海を見にいった。
まだ寒い、さむい日のこと。
父と乗った遊覧船や、母と歩いた海岸線を
小さいときの思い出と、私は知らないあの日の海を重ねる。
まだまばらな観光客や、そこに住む地元の人々も同じように
海を見ていて、
みんなきっと違う海をみていた。



「色即是空」 多田 さやか



展示風景

あの日から
我々の住む世界には巨大な化物がいる。
それは大地を揺らし、黒く濁った海を引きずり出した。
街は破壊しつくされ、信じられないほど多くのものが失われた。
さらにその化物は放射能を撒き散らし、静かな美しい土地を地獄の底に変えた。
彼はまだ立ち去っていない。
人々に寄生している。
我々は、心まで食い尽くされてはいけない。
それはこの土地で生き続けるための覚悟であり、また、死者の魂を浄化させる
唯一の方法となるだろう。